



## 先進校に学ぶキャリア教育の実践

# 探究を軸に“学校を越える”場面を創出し 社会で生きるエージェンシーを育む

### 伊勢崎高校(群馬・県立)

学校を越えて社会に出ていき、五感を使って学ぶことを促す探究プログラム「iTanQ」。  
生徒自身の「やりたい」を起点にアクションを重ねるなかで、  
自ら一歩を踏み出していく力が育っています。

#### こんな学校は必読！

- ✓ 生徒の主体性に課題感がある
- ✓ 探究活動の“やらされ感”を改善したい
- ✓ 学校の枠組みを越えた経験・交流を充実させたい

取材・文／藤崎雅子

#### 「学校を越えたつながり」 「五感を使う」に重点

普通科とグローバルコミュニケーション科を設置し、地域から世界を見据える伊勢崎高校。2023年度、同校を拠点に探究活動を盛り上げることを目指し、探究プログラム「iTanQ（あいたんきゅう）」を立ち上げた。名称の「i」は、校名のイニシャル以外にイノベーション、アイデア、私、愛などの意味を込めたものだ。総合的な探究の時間の「iTanQ蒼穹」を中心に、希望者対象の「iTanQスクール」「iTanQ（クロス）」「iTanQスタディツアー」「iTanQ+（プラス）」という5本の柱で構成される（図1）。

本格的に動き出したのは翌24年度だ。この年、「自ら考え、判断し、行動できる生徒」の育成を目的とする群馬県の事業（※）に指定されたことを機に、教科学習を含む学校教育活動全体で生徒のエージェンシーを育む方向性を打ち出した。同年から探究部長を務める山口将史先生は、同校が目指すエージェンシーについて、「生徒一人ひとりが、『過去を振り返る』『未来を見据える』という時間軸と、『他者と共にある』『社会に何らかのアクションを起こす』という空間軸を踏まえて、『今』をどのように生きるかを考える力」と整理（図2）。その育成の中心的な活動として「iTanQ」を位置づけ、取り組み意味を学校全体で共有した。そして、内容や手法については、「学年・学校・地域・国を越えて、つながる」「社会

の現実を、五感を使って、観る」の2点に重点を置いて再設計し、プログラムに命を吹き込んでいった。

「エージェンシーとは『学校を越えて社会で生きる力』と解釈することができますが、それを学校の中だけで育てられるとは思いません。実際に学校を越えて社会に出ていき、五感を使ってさまざまな経験をすることが不可欠です。まずは総合的な探究の時間をはじめとして学校を越えていく場面を設定することから、教育活動全体に波及させていきたいと考えています」（山口先生）

#### 生徒自身から生まれた課題で アクションを促す

現在、「iTanQ」の5つの活動はそれぞれのように実施されているが、総合的な探究の時間（1単位）で展開している「iTanQ蒼穹」から見てみよう。

大まかな内容は、1学年で身近な困りごとをテーマにした個人探究、2学年で地域課題の解決に向けたグループ探究を実施し、3学年でもう一度個々が自らの言葉でそれまでの活動を論文にまとめるというものだ。その大枠はプログラム立ち上げ当初から変わらないが、課題設定のスタンスはブラッシュアップしている。例えば2学年の地域探究では、学校側が提示した課題から生徒が選んでゼミに振り分けるという方法を見直し、生徒一人ひとりが興味・関心、やりたいことについてマインドマップを使って掘り下げ、それを社会課題に結びつけるという

※ スチューデントエージェンシー・ハイスクール（SAH）：生徒のエージェンシー（自分と社会をより良くしようと願う意志、原動力）を重視し、「自ら考え、判断し、行動できる生徒」を育成することが目的



## School Data

2004年設立／  
普通科・グローバルコミュニケーション科  
生徒数833人(男子452人・女子381人)  
進路状況(2026年3月卒業生)  
大学219人・短大6人・専門学校25人・  
就職3人・その他13人

## Outline

「知性を磨き、品性を高め、情操を養い、高き理想に向かって歩む」を教育目標とし、主体性・社会性・人間性・将来性・国際性の育成を目指す。2024・25年度群馬県スチューデントエージェンシーハイスクール指定校。2023年度から取り組む探究プログラムiTanQで三菱みらい育成財団「みらい育成アワード2025」カテゴリー1(東地区)グランプリ受賞。

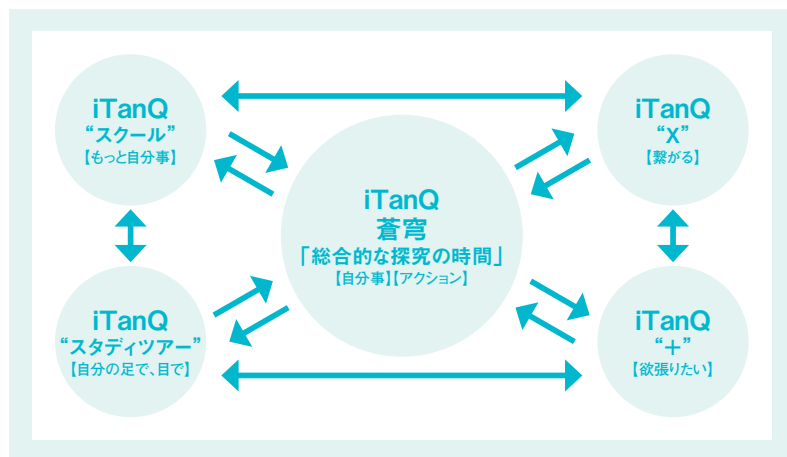


探究部  
企画・戦略リーダー  
松本誠仁先生



探究部長  
山口将史先生

図1 「iTanQ」の全体像

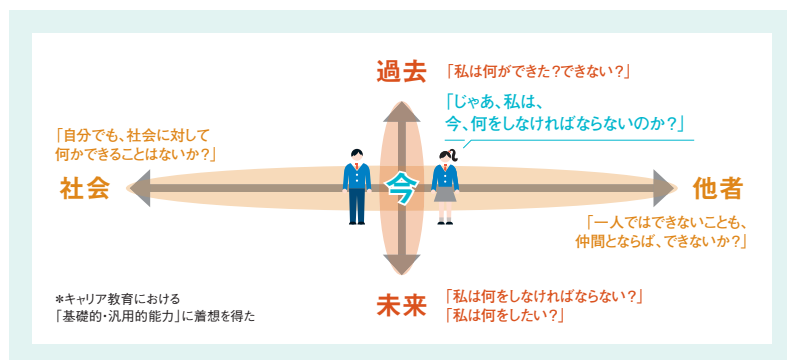


流れに変更した。生徒から生まれた問いを生成Aで分類してゼミを設定し、そこに担当教員を割り振っている。

「人から与えられるテーマに面白みを見いだせない。やらされ探究になってしまいます。そうならないよう、生徒自身が本当にやりたいと思うことをとことん突き詰められる楽しい時間にとしたいと考えました」(山口先生)

このように生徒の興味・関心を起点に探究を進めていくうえで、3つの視点を重視している。その1つ目は「調べてわからない問いづくり」だ。書籍やインター

図2 伊勢崎高校の「エージェンシー」の捉え方



ネット調べればすぐわかる問いは、探究には向かない。だからといって壮大な問いは、生徒自身のアクションにつながりにくい。そのため、生まれた問いを手が届くところまで徹底的にブレイクダウンしていく。例えば、「地域の人」なら子ども、高齢者、子育て中の人などに、「学校」なら小学校、中学校、特定の学校などに具体化する。そのなかで「自分たちがなんとかしたい!」という思いを高めていく。全体が同じレベル感で取り組むためのツールとして「問い・課題チェック項目」を作成し、生徒・教員に配付している(図3)。

「生徒は問いができたならその内容を担当教員にプレゼンし、チェック項目がすべてクリアになったら情報収集の段階に進めます。また、担当教員は、手が止まっている生徒がいたらチェック項目を基に問いかけることで思考を引き出す支援をしています」(山口先生)

2つ目の視点は「調べなければわからない情報収集」だ。設定した問いについて、生徒自身が現場に足を運んで話を聞いたり実験をしたりし、五感を使って一次情報を集めることを重視している。その手始めとして、1学年全員が探究型インターンシップに取り組む。生徒一人ひとりが関心のある企業・団体を自ら探して依頼して職場体験を実施することで、「学校を越えることは難しい」学校は自分のやりたいことを尊重している」という意識づけを図っている。そのうえで、2学年では探究グループごとに実施したいフィールドワークを自ら企画・実施することを促す。週1回の授業時間以外に行うことも可能にするため、生徒が計画書を作成して申請し、承認されれば公欠扱いとする「申請型フィールドワーク」の仕組みを整備(図4)。これを活用し、遠方に出掛けてフィールドワークを行う生徒も多い。

「あえて単位数を増やさず、1単位でもここまでできるのだ、ということを示していきたいと考えています」(山口先生)

3つ目の視点は「小さなアクションを!」。課題解決策を考えるだけでなく、何らかのアクションを起こすことをゴールとしている。実際に、地域でさまざまな活



図5 生徒アンケートの結果より(2025年度3年生)

| 質問                                      | 肯定的な回答<br>(前年度の<br>3年生との比較) |
|-----------------------------------------|-----------------------------|
| 地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい              | 67.4%<br>(15.6pt ↑)         |
| 私に関わることで、変えてほしい社会状況が少し変えられるかもしれない       | 57.3%<br>(13.2pt ↑)         |
| 授業の内容について、「なぜそうなのか」と疑問をもって自分で考えたり調べたりした | 67.9%<br>(10.6pt ↑)         |
| 人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある                     | 65.1%<br>(6.5pt ↑)          |
| 将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい                    | 70.6%<br>(4.2pt ↑)          |
| 国際社会の課題解決に貢献したい                         | 61.5%<br>(12.9pt ↑)         |
| この学校を中学生におすすめできる                        | 76.4%<br>(6.7pt ↑)          |

※三菱UFJリサーチ&コンサルティング「高校魅力化評価システム」を活用

Interview

素朴な疑問から、  
もっと深めたい気持ちへ

中学3年生のときから「iTanQスクール」に参加しています。高校入学後、昨年は、素朴に疑問をもった「なぜ伊高の女子は県内進学志望が多いのか」をテーマに探究しました。校内でアンケートを取ってみると仮説と反した結果が出たり、他校との比較調査で新しい視点が得られたり、進めるうちにさまざまな発見があるのが面白くて、一度面白さを感じると、もっと知りたい、もっと深めたいという気持ちが出てきます。私は元々、積極的なタイプではないので、人前での発表は憂鬱でしかなく、緊張で声が震えて顔が真っ赤になっていました。そんな自分を変えられたらという思いで校外の方の前で発表する経験を重ねるなか、少しずつ自信がついてきて、今は「探究の成果をみんなに知ってほしい」という気持ちで発表を楽しむようになりました。(普通科2年生・並木愛莉さん)

五感を使うと、  
見えなかったものが見えてくる

以前の私にとって、勉強は「受験のためにがんばるもの」でした。そのため中学生の時、「iTanQスクール」の募集チラシの「五感を使って学ぶ」という言葉に「どういうことだろう?」と興味がわいて「iTanQ」に参加しました。高校入学後もさまざまな「iTanQ」の活動に参加していますが、当初の疑問が最も腑に落ちたと感じたのは、「iTanQスタディツアー」に参加したときです。例えば鹿児島の特攻隊の資料館で生々しい展示物に触れるなどして心動かされ、「これが五感で学ぶことなんだ!」と。自分が意識して五感を使おうとすると、見えなかったものが見えてきます。その体験が日常の学びの意識に影響していて、教科書に出てくる事実や言葉をただ暗記するのではなく、その向こう側にあるものを想像しながら授業に臨むようになりました。自分なりの勉強スタイルを見つけられそうです。(普通科2年生・田代美里さん)



「iTanQ」の活動においても、当初、積極的な生徒は一部だった。しかし、「特別な生徒だけではなく全員が行動を起こせる環境をつくりたい」(山口先生)と、力強く生徒の背中を押してきた。

そのなかで一步を踏み出した生徒たちには、さまざまな変容が見られるようになってきた。活動の振り返りには、「前回は失敗することが嫌で興味の無いことを探究したが、今回は失敗を恐れずに自分のやりたいことができた」「自分が疑問に思ったことを素直に口に出せるようになり、そのままにするのではなく、じゃあ調べてみよう」という思考回路になったなど、意識や行動の変化が語られている。

最近では、何かを募集すると、「チャンスがあるなら挑戦してみたい」と想定を上回る数の生徒が集まる。人前で発表する機会にも積極的に手を挙げ、本番直前まで自ら粘り強く改善を重ねる姿

が見られる。そんな仲間の挑戦を周囲も素直に認め、「自分もがんばろう」という前向きな雰囲気広がっているという。探究部企画・戦略リーダー・松本誠仁先生はこう話す。

「生徒の目の輝きが変わってきました。これまで勇気の出なかった生徒も、自分がアクションを起こすと誰かのためになるという楽しさを実感し、自信を高めていると感じます」

生徒アンケートの結果を見ると、新しい「iTanQ」に取り組んだ1年間で、「地域をより良くするため、地域における問題に関わりたい」「私に関わることで、変えてほしい社会状況が少し変えられるかもしれない」などの肯定的回答が大きく上昇(図5)。より良い社会に向けた意欲の高まりがうかがえる。

今年度、「iTanQ 蒼穹」の授業の中に、3年生が2年生に向けて探究成果を発

表し、プロセスに焦点を当ててアドバイスする場面を設定した。先輩から後輩へ、探究手法と共にマインドも受け継がれ、広がっていくことが期待される。

「学校全体が、恐れずに一步踏み出しやすい環境になってきている。その流れに乗って、自ら行動する生徒が増えていくのではないだろうか」(松本先生)

**生徒に委ねる場面が  
探究以外にも増加**

生徒が自ら挑戦しようとする姿は、多くの教員の生徒観にも影響しているようだ。「探究活動の様子を見ていて、生徒たちは仕掛け次第でこんなに自ら学校を越えていくのだ」と新鮮な驚きがあった」と松本先生。教員全体に、以前は生徒を動かすには手取り足取り指示しなければならぬ雰囲気があったが、生徒の潜在的な力を信じて引き出そうと

いう意識が広がっているという。

「探究活動以外の生徒会活動や学校行事、部活動などのさまざまな場面でも、『生徒自身でできる』という前提で必要な準備を行い、目標やスケジュールなどを共有したうえで生徒に委ねる場面が増えています」(山口先生)

多彩なプログラムをまず意味のある活動として軌道に乗せることが大事だった2年間を経て、今後は体制を整え安定的に運営する基盤づくりと、「iTanQ 蒼穹」のさらなる充実による全生徒へのアプローチ強化に取り組んでいく方針だ。

「生徒が『やりたい』を突き詰めてアクションできる教育環境を整え、自分の力で学校を越えていくことが当たり前になる学校文化をつくっていききたい。生徒一人ひとりがその環境で身につけたことを、今後の人生に活かして欲しいと考えています」(山口先生)